

茶ぐわー ゆんたく

お茶を飲みながら、
ぎのわんの歴史を
のぞいてみませんか？



台風季節がやってきました！

みなさん、台風対策はお済みですか？また、どのような台風対策をしていますか？排水溝を掃除する、浴槽に水を溜めておく：など、沖縄に住む私たちは、幼い頃から祖父母や親の台風対策を知らず知らずのうちに覚えて、台風に対する知識を得てきたのではないのでしょうか。では、かつての宜野湾は、どんな台風被害を受け、どのような対策をしていたのでしょうか。

戦後の沖縄には、1951（昭和26）年のルース台風、1956（昭和31）年のエマ台風などが襲来しましたが、中でも1949（昭和24）年7月23日のグロリア台風は最大瞬間風速78mの暴風で、宜野湾村宇宜野湾の家屋は全滅状態でした。宜野湾村内は全壊・半壊合わせて、1,174棟（1,373戸数）もありました。

被害が拡大した理由は、沖縄戦で地形が丸裸な状態で、集落内の樹木や石垣も取り払われ、強風の威力を直に受けたからでした。また当時は、ソー・バイ・フォーの規格住宅（戦災復興住宅）やトタン屋根のよな簡易な家が多かったことも原因でした。

問

市立博物館

☎870-93317



▲台風ティルダが上陸し、家屋が半壊している様子
1961（昭和36）年 宜野湾村内

そのような状況下で、当時の住民の証言によると「家族で近所の頑丈な茅葺家に避難した」「丈夫な家に住む」私の家に70人余りの人が避難してきた」という話があり、緊急時にはお互いに協力し合って難をしのいでいたことがわかります。これは今でも有効な対策で、現在は市民会館などの施設が「避難所」としての役割を担っています。

現在の沖縄で「お互いに協力し合って難をしのぐ」というかつての教訓は、コンクリート造りの家が登場して以降、必要性が薄れつつあります。ですが、この教訓は一人ひとりの台風対策が災害を拡大させないという点で、今でも大切な教訓なのです。



▲『間切図』（沖縄県立博物館・美術館所蔵）
に一部加筆

問

文化課
☎893-4430



左がカーへ行く道、右が西海道（フルミチ）



真志喜シチャヌカー



ジヤナマガヤー入口
（国道58号沿い北側歩道）

今回は真志喜までですが、昔の人々が歩いた道は残っていても、道筋として残っている場所が多数ある事がわかりました。文化課では引き続き調査を続けていきます。

市報5月号の「ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く（其の62）」では、西普天間住宅地区で発見された「歴史の道（中頭方西海道）」を紹介しました。「歴史の道」とは歴史的に意義があり、現在は街道としての機能を失った「古道」の事で、宜野湾市では主に普天満参詣道、中頭方西海道、野嵩スディバナビラ石置道（番所道）、フンジャンアブシが該当します。文化課では「歴史の道」とその関連文化財を国の史跡とすることを目指しています。

西普天間住宅地区にも残っていた中頭方西海道は近世に整備された宿道で、市内では宇地泊、大謝名、真志喜、大山、伊佐を通り北谷から読谷へ向かいます。現在の国道58号に近い道筋です。



其の63

今回は、宇地泊から真志喜に残る中頭方西海道の痕跡を紹介します。宜野湾市側の始点は宇地泊川（牧港川）の高架橋あたりで、高架橋から国道58号を400mほど進むと北側にジヤナマガヤーの道筋が残っています。今回はジヤナマガヤーから県道34号線沿いの大謝名集落東側のフルミチを通るルートを行いました。フルミチは住宅地に当時の道筋のまま残っており、国道58号に合流後、真志喜シチャヌカーの東側を通って大山へ向かいます。